

旧約聖書の中の祈り

□「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□「旧約聖書の中の祈り」の学びの進め方とその目的

旧約聖書の中には、全部で48の祈りがあります。これらの祈りをひとつひとつ学んでいって、祈りについてのいくつかの結論を導きたいと思います。その結論を先に言うと、次のとおりです。

1. 旧約聖書の中の祈りの大半は、とりなしの祈りである
2. 祈りは、しばしば、嘆願である
神に何かを求める。たとえば、エリシャは、自分のしもべに天使たちの軍勢を見させてほしい、と神に願った。ヨナは、いったんは拒んで逃げてしまった使命を再び帯びて遣わされるように祈った。ヒゼキヤは重病の中で自分の命が助かるように祈った。ネヘミヤは周辺からの激しい脅しから守られるように祈った。
3. いくつかの祈りは、神に感謝をささげる、あるいは神をほめたたえる歌である
そのような祈りをしたのは、たとえば、ハンナ、ダビデ、そしてハバクク
4. いくつかの祈りは、特別な状況の中で神のみこころを尋ねる祈りである
5. 祈りは、時として、神の約束に基づいてなされる
モーセ、ソロモン、そしてダニエルは、それぞれ、それまでに神から与えられていた約束に基づいて祈った。彼らは、神が約束を守るお方であることを知っていたからこそ、その約束を握って祈ったのである。
6. 祈りは、時として、罪の告白を伴う（ダニエル9章）
7. 祈りは、時として、祝福の祈りである
レビ族の祭司がイスラエル民族全体のために祝福の祈りをする（Ⅱ歴代30：23～27）
8. イスラエル民族の中で責任ある地位につく指導者は、民族全体のために祈る責務を負う
そのような例は、サムエル、ソロモン、そしてエズラ

9. 祈りには、時折、付随した行動が伴う。泣く、断食する、荒布を着る、灰をかぶる
10. 祈る時、人々は様々な姿勢をとっている。立つ、跪く（ひざまづく）、両手を上に伸ばす、エルサレムとそこにある神殿の方を向く、犠牲の動物を前にして祈る、寝室で壁の方を向く、など
11. ダニエルは1日のうちに3度、時間を決めて祈っていた
特定の時刻を祈りの時間とするような定めは、ない。しかし、一日の中で、自分で時間を決めて祈る習慣をつけることは、神との交わりを通して祝福を受けるために必要
12. 祈りは、モーセの律法の中で義務付けられていない。また、あらかじめ書かれた式文のような祈りは、旧約聖書の中にひとつもない。祈りとは、自分が必要を覚え、その必要に応じる力を神が持っている意識している人から、自然と沸き起こってくるものである。
13. 祈りは、時折、犠牲をささげながら祈られる。犠牲をささげないとしても、犠牲をささげる場所や時間と関連付けて祈ることもあった
14. 旧約聖書の中に記録された祈りには、大きくは5つの要素がある
 - (1) 神による導き
 - (2) 神による癒し
 - (3) 神のさばきを免れる、あるいは止める
 - (4) 神に自分の個人的な望みや必要を求める
 - (5) 神に特別な状況のもとで守りを求める

前回までに48の祈りのうち、20の祈りを学びました。本日は、21～30の祈りです。

□本日のアウトライン

21. ダビデ契約に関して
22. 神殿奉獻に関して
23. 神が神殿を受け入れたことに関して（前の神殿奉獻の祈りに対する神の応答）
24. 民の罪に関して
25. 民の祝福のための祭司による祈りに関して
26. アッシリヤの脅威に関して
27. 癒しのため、ヒゼキヤの祈りに関して
28. マナセの回復に関して
29. マナセによる祈りに関して
30. 王の長寿のための祈りに関して

旧約聖書の中の祈り【48の祈り】 ③

21. ダビデ契約に関して

(1) 神がダビデと契約を結び、4つの永遠の事柄を約束した（I歴17:10~14）

- ① 永遠の家、または王朝（12節）
- ② 永遠の王座（12節）
- ③ 永遠の王国（12節）
- ④ 永遠の子孫（14節）

IIサム7:11~16・・・ダビデ契約の記
事であるが、後継者ソロモンに焦点。
彼の罪の問題とその対処も預言される。

(2) I歴17:16~27 特に25節

(3) このダビデの祈りは、IIサム7:18~29の並行箇所。神が自分と契約を結んでくださったことに感謝をささげる祈りである。

22. 神殿奉献に関して

(1) II歴6:12~7:3 特に13、40~42節、7:1

(2) この箇所は、I列8:22~53の並行箇所。ただし、列王記には記述のない3つの要素が、補足されている。

- ① 13節 姿勢・・・列王記では両手を天に向けて差し伸ばしたとあった。歴代誌ではさらに、「ひざまずいた」とある。（列王記でも、8:54には「ひざまずいていた」と記されている）
- ② 40~42節 シャカイナ・グローリーを神殿の中へ招いた
- ③ 7:1 この祈りには、犠牲をささげることを伴っていた

23. 神が神殿を受け入れたことに関して

(1) II歴7:11~22、特に12、14~15節

(2) この箇所は、I列9:3~9の並行箇所。前の神殿奉献の祈りに対する神の応答

(3) 12節 神は、ソロモンが建てた神殿を、犠牲をささげる場所として選んだと宣言された。その場所は、それまではシロ（ヨシュア18:1、Iサム1:3）、そしてギブオン（I歴16:39~40、21:29~30）にあったが、以後、エルサレムとなった。

(4) 14~15節 もし民が罪を犯したなら、その者は神殿に来て、神の赦しを求める祈りをしなければならない。神は神殿の前でなされる正直な祈りを聞かれるであろう。→ この祈りは、嘆願であり、同時に罪の赦しを求める祈りである。

24. 民の罪に関して

(1) II歴30:17~20 特に18節

(2) 過越の食事にあずかった者のうちに、モーセの律法に違反して、儀式的に汚れた状態のままの者がいた。本来であれば、過越の食事に備えて自分自身の汚れを除くために身を清めるべきだったのに、それをしなかった。この民の罪について、ヒゼキヤが祈った。

(3) これは、とりなしの祈りである

25. 民の祝福のため、祭司による祈りに関して
- (1) II歴 30 : 23~27 特に 27 節
 - (2) ここでは、祭司が民を祝福し、民のために祈った。そして、その祈りは、「主の聖なる住まい、天に届いた」。
 - (3) この祈りは、祝祷である。
26. アッシリヤの脅威に関して
- (1) II歴 32 : 20~23 特に 20 節
 - (2) この箇所は、エルサレムに対してアッシリヤの脅威が迫っているときのことである。王のヒゼキヤと預言者のイザヤが、アッシリヤの脅威のゆえに祈った。
 - (3) この祈りは、国家存亡の危機にあたり、神がアッシリヤの手からエルサレムを救ってくださるようにとの祈りである。
27. 癒しのため、ヒゼキヤの祈りに関して
- (1) II歴 32 : 24
 - (2) わずか 1 節であるが、II列王記 20 : 1~7 に記されたヒゼキヤ王の病気に関する記事の要約である。
 - (3) ヒゼキヤの祈りは、神が自分を癒してくださるようにとの祈りであり、神はその祈りに答えられた。
28. マナセの王位回復に関して
- (1) II歴 33 : 10~13 特に 13 節
 - (2) この祈りは、マナセが再び王位に復帰できるようにとの願いである。マナセが祈ると、神は彼の祈りに答え、マナセは王位に復帰した。
 - (3) この祈りは、嘆願である。
29. マナセによる祈りに関して
- (1) II歴 33 : 18~19
 - (2) 18 節「彼が神にささげた祈り」、19 節「彼の祈り、その願いが聞き入れられたこと」・・・前の「マナセの王位回復に関して」で扱ったマナセの祈りのこと
 - (3) この祈りは、嘆願である。
30. 王の長寿のための祈りに関して
- (1) エズラ 6 : 10
 - (2) ペルシヤの王ダリヨスは、クロス王の勅令を確認し、イスラエルの民に、エルサレムの神殿を再建することを認めた。そしてダリヨス王は、イスラエルの民に命じて、エルサレムの神殿において天の神に犠牲をささげ、ペルシヤの王と王子たちの長寿を祈るように求めた。
 - (3) この祈りはとりなしの祈りである。